

1-L-1

## 近代ヨーロッパと科学的思考

濱田道夫

本講演では、近代ヨーロッパで形成された科学的思考の基本的特徴とその限界について概観する。

近代科学は、15～16 世紀以来西ヨーロッパを中心に発展していった。デカルトが方向づけた近代合理主義思想の特徴は、まず物理学・数学をはじめとする自然科学がその基礎にあること、そしてそれゆえに自然と人間とが切り離されたかたちでとらえられてきたことである。自然界と人間との切断は、その後に生まれる経済学など社会科学の考え方にも投影されることになる。こうした思考は第 2 次大戦後、非ヨーロッパ社会への関心が高まるとともに、ある程度相対化される傾向にあったとはいえ、自然・社会・人文など科学一般にわたって現在まで根強く続いている。

そのなかで、ヨーロッパ的価値あるいは近代合理主義への過信からくるさまざまな不都合、とりわけ環境問題をはじめとする社会的困難を克服するために思考の枠組みの転換が提唱されてきた。自然と人間との分離を前提とした思考は、はたしてどこまで有効なのだろうか。明治以来わが国は、欧米に「追いつき追い越せ」のスローガンのもと、科学・技術・政治・思想・文化等の分野でひたすらヨーロッパ的価値を追い求めてきたが、いまあらためてそれを見直し、それを超える新しい「合理主義」が模索されている。